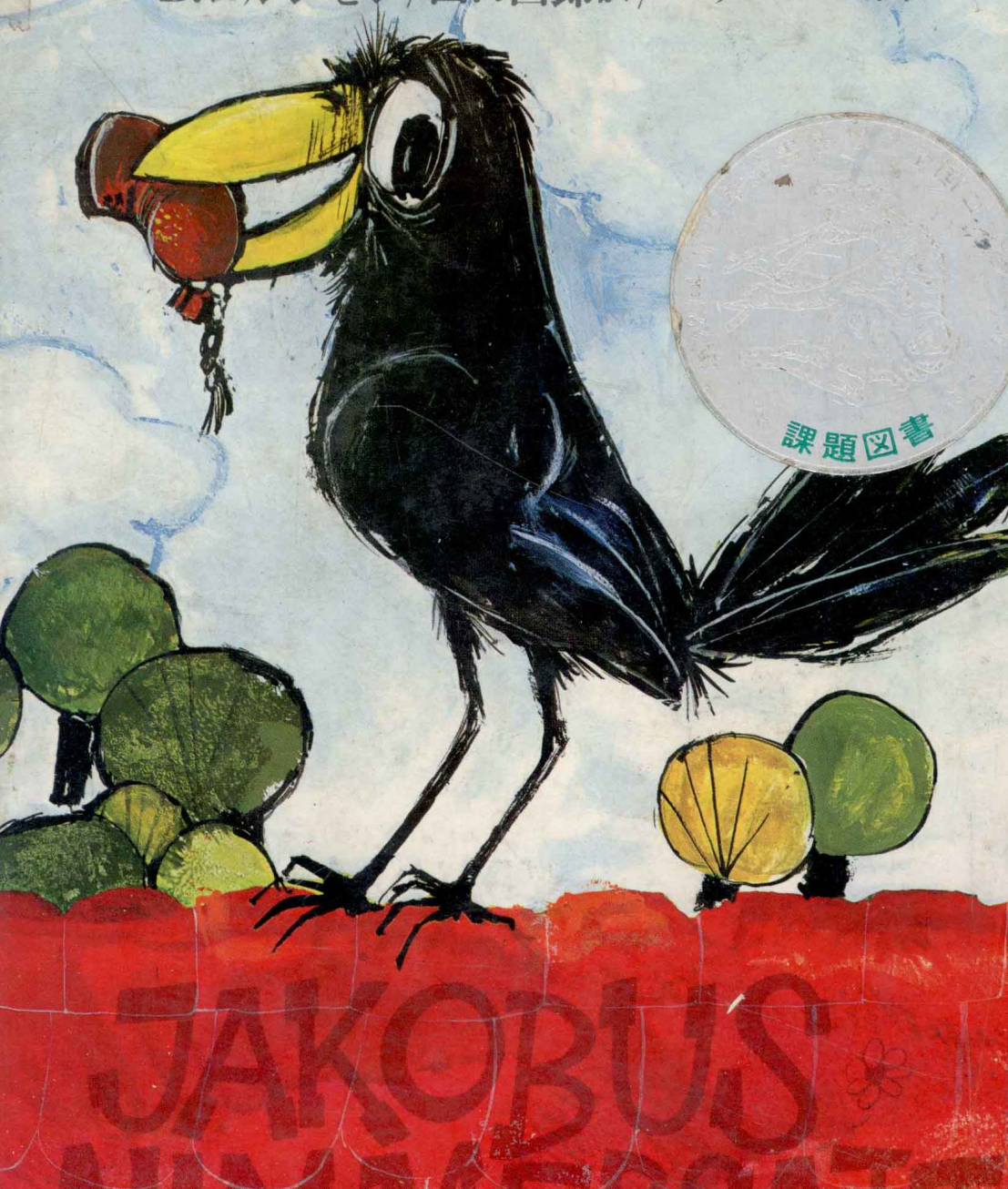


のどか森の動物会議

B.ロルンゼン/山口四郎訳/K.グロース画



課題図書

JAKOBUS



● *Jakobus Nimmersatt*
のどか森の動物会議

B. ロルンゼン 山口四郎訳 K. グロース画

あかね世界の児童文学・3

訳者紹介 山口四郎 (やまぐちしろう)

1919年東京に生まれる。東京大学文学部独文科卒業。現在中央大学文学部教授。主な著書に「ドイツ韻律論」訳書に「ヘッセ詩集」などがある。児童文学関係の訳書としては本書が24冊目である。

あかね世界の児童文学
のどか森の動物会議

3



訳者 山口四郎

著者 岡本陸人

新興印刷製本株式会社 (本文)

錦明印刷株式会社 (オフセット)

中央精版印刷株式会社

株式会社 あかね書房

東京都千代田区西神田3-2-1 〒101

電話 03 (263) 0641 <代>

1976年5月25日第8刷

NDC 933

8397-16803-0027

のどか森の動物会議

山口四郎訳

あかね書房 1976

157p 21cm (あかね世界の児童文学3)

© 1975 Printed in Japan 訳者との契約により検印なし
落丁・乱丁本はおとりかえします
定価はカバーに表示してあります

日本の少年少女のみなさんへ

ボイ・ロルンゼン

日本はドイツからとても遠いところにあります。ですから、わたしはまだ日本へは行ったことがありません。お国についてのわたしの知識は、みんな本や地図からおそわったものばかりです。

みなさんは大小たくさんある島に住んでいらつしやいますね。それから日本の産業のことは、これはもう、世界じゅうの人がだれでも知っています。日本では、とほうもなく大きいタンカーを造っていますね。首都は東京といって、本州という名の島にあるでしょう。いちばん高くて美しい山は富士山といつて……。

ごめんなさい、わたしはまだあまりよく知らないのです。日本については、もっとよく知りたいとは思っているのですが。

そんなわけで、たとえばみなさんのお国にも、からすや、りすや、ふくろうや、ハムスターがいるかどうかわたしは知りません。

みなさんだってわたしのことを知りませんね。

そこでちよつとごめんこうむつて、わたし自身のことをちよつとお話ししましょう。わたしはボーイ・ロルンセンといって、二人の男の子の父親です。西ドイツのずうつと北部の、小さい町に住んでいます。町の名はブリュンスビュッテルといいます。ちよつと地図を見ていただけませんか？ 地図を見るとこの小さい町のところで、大きな川が有名な運河うながとつながっていることがわかるでしょう。ところでこの運河ですが、世界のあらゆる国のたくさんの船が、毎日毎日ここを通るのです。もちろん日の丸をつけた日本の船も通ります。

船は世界をまわって航海こうかいしますが、世界をまわってあるくのは、船や飛行機ひこうきや手紙だけじゃありません——本だって、お話だってそうです。

というわけで、のどか森の動物会議どうぶつかいぎの話も、ちようどみなさんのお国、日本に着いたところです。

ヤコブスとヤコブスの仲間なかまの動物たちが、どうやってじぶんたちの森をすく

ったか、そつとおしえろっていうんですか？

いや、だめです。そんなことを、最初からおしえるわけにはいきません！

わたしはみなさんに、ごじぶんでこの話を読んでもらいたいのです。そうすりゃわかることですもの。なんとかみなさんが、この話はなかなかおもしろいじゃないかと思ってくださるといいんですが……。

ドイツの小さい町ブリュンスビュッテルから、遠い日本の、大きい島小さい島に住むすべての少年少女のみなさんへ。

一九七五年四月



もくじ

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
土方の出番……70	うわあ、うまそうだ……クアー！……63	ほえるやつは頭がはげる……55	さあ、いよいよこれからだ！……49	二十九通の青い手紙……41	のどか森から手を引け！……35	集合場所《かみなりがし》……29	ヤコブス、まさか聞きちがえでは？……21	マグヌス村長のとんでもない考え……13	大食いヤコブス……8





- 11 金^{かね}がぎつしりのボール箱^{ばこ}……78
- 12 きつつきタデーウスの大ふんとう……86
- 13 いふし出し……96
- 14 女、子どもには手を出すな！……106
- 15 蚊^かとねずみ大活躍^{だいかつやく}の夜……113
- 16 うさぎのカルル坊^{ぼろ}のちえ……122
- 17 さかさまの世界……132
- 18 のどか森あらため百万^{ひゃくまん}長者^{ちやうじや}の森……143
- 作者と作品について……155

装幀・插画／K・グロース
見返し画／エム・ナマエ

JAKOBUS NIMMERSATT

ORDER: DER MILLIONENWALD VON POGGENBÜTTEL

Boy Lornsen, illustration and cover by Karlheinz Gross

(c) 1968 by K.Thienemanns Verlag, Stuttgart

Illustrations by Karlheinz Gross

Japanese translation rights arranged

with K.Thienemanns Verlag, Stuttgart

through Charles E. Tuttle Co.,Inc.,Tokyo

のどか森の動物会議

ボイ・ロルンゼン 山口四郎訳



1 大食いヤコブス^{おおぐ}

「カア！ クワア！」からすの大食いヤコブスは、やけになつて鳴きたてました。

ヤコブスはかわず村の上を、輪^わをかいて飛^とんでいるところでした。石を投げればとどくぐらいの高さです。おながグウグウいきました。大食いヤコブスにとって、グウグウ鳴るおながぐらいいいやなものはありませんでした。

「見わたすかぎり、ソーセージの切れっぱしひとつありゃしない！」ヤコブスはいまいましそうにまた鳴きたてました。「これじゃあ、元氣を出せつたつて、どだい無理^{むり}つていうもんだ！」

ヤコブスはそれから小学校のまん中のえんとつの上を、くるりと旋回^{せんかい}してみました。子どもたちが帰ったあとの校庭を、ひとわり見てみようと思つたのです。ここでは前にもなんどか、いいえものにありついたことがありました。でも、きょうはどうもついでないようでした。バナナの皮が一枚^{まい}、登攀棒^{とはんぼう}の下にころがっているだけでした。バナナの皮じゃあ、いくら大食いヤコブスだつて話にはなりません。

アントン・チムトツケルんとこのちつぽけな店のショーウインドーに、くちやくちや



にかんだチュウインガムがはりつけてありました。ちびのビリのしわざでしたが、これもヤコブスの口にはあいませんでした。

「ちえつ、ガムかい！こいつはなんの味もないくせに、口に入れるとべったりはりつきやがるんだ。」ヤコブスはいまいましげにいうと、村のぼだい樹^{じゆ}の上をさつとひと飛び^として、マグヌス村長の堆^{たい}肥置場^{ひおきば}の上へ行きまし

た。

大食い^{おおく}ヤコブスはかわず村とその近所^{きんじよ}でいちばん大きい、いちばん強い、いちばんずるがしこい、いちばん黒い、いちばん腹^{はら}べこのからすでした。ヤコブスはしょっちゅう腹をすかせていて、いつもなにか食べたい食^たべたいと思^{おも}っていました。朝^あ起きたときも、お昼も、夕方^{ゆふぐ}も、それからまたそのあいだじゅうもです。

ヤコブスのいちばんすきだったのは、メットソーセージという一種^{いっしゆ}のポークソーセージでした。いぶしたにおいがして、なんともいえずおいしかったからです。しかしもつとほかの栄養^{えいよう}のあるものも食べました。たとえばチーズの皮、サンドイッチ、ひまわりの種^{たね}、パウンドケーキ、果汁^{かじゅう}入りのオートミール、酢^すづけのにしん巻^まき……。もつとも酢^すづけのにしん巻^まきだけは、あんまりすっぱくないときだけ食べました。

大食いヤコブスはこのかわず村ではなく、のどか森に住んでいました。森は村からたつぷり千歩^{ちほ}ほどのところにあり、太陽は毎朝ここからあがりました。村の人たちはこの森のことなど考えたこともなく、荒^あれほうだいにほうってありました。

森の動物たちにしてみれば、これはかえってありがたいことでした。木々はすくすく伸びて塔^とみたい^とに高くそびえ、りっぱなこずえをのばしていましたし、黒いちごのつたはいたるところにぎっしりはびこり、人のはいりこめない壁^{かべ}をつくっていました。森のあき地

にはこけもや山いちごがいっぱいなり、またみずみずしい草がしげっていました。どんぐり、ぶなの実^み、もみの実、はしばみの実、きのこなんかもありあまるほどありました。この森の動物たちが、ほかの森に引越^{ひっこ}すことなど考えたこともないのはとうぜんでした。

もつとも、かわず村の人たちにしても、けっこうめぐまれた暮^{くら}しをしていました。もちろん水車^{すいしゃ}のかかった小川に、ミルクやはちみつが流れていたわけではありません。しかしこの村のさくらんぼはいちごぐらいに大きく、いちごはじゃがいもぐらいに大きく、じゃがいもはほとんど一ポンド半ぐらいになりました。またかわず村のめんどりはものすごく勤勉^{きんべん}で、一日に二つずつたまごをうみました。さらにこの村のおんどりはまったくかわつていて、前の晩^{ばん}に時刻^{じこく}をそつとささやいておけば、つぎの朝、いつておいた時刻きっかりに、ときをつくるのでした。人間も動物もおたがいにほんとに仲^{なか}がよくて、最後^{さいご}にけんかしたのほもうずつと前、だれももう思いだせないくらい昔^{むかし}のことでした。

かわず村とその近所^{きんじよ}は、こんなぐあいで平和なものでした。

あたりが暗くなりました。星がかがやきはじめ、その数がだんだんふえていきました。月がゆつくり、またのんびり学校の屋根の上にあがって、家々の窓^{まど}にあかりがともりました。

大食^{おおぐ}いヤコブスの見つけた食べものは、結局^{けつぎよく}しつめたラスクとペーコン一枚^{まい}だけでした。

た。食い道楽のヤコブスにしてみれば、どっちも腹のたしになるようなものじゃありませんでした。

「ちえつ、くそ！」ヤコブスはいまいました。「きようは腹ぺこで帰らにやならんのかい！」

ヤコブスは最後にもういちど、かわず村の上を大きくぐるつと飛んでみました。それからのどか森のほうに向かおうとして、ちょうどそのときふとある発見をしました。村の旅館《ななめ角屋》の裏がわの窓から、白いパイプの煙が出ていたのです！

ヤコブスはおやつと思い、何事だろうと目をぼちぼちさせました。部屋からパイプの煙がもうもうと出ているからには、窓があいているにちがいありません。くぎが磁石に引きつけられるように、大食いヤコブスはいいた窓に引きよせられました。

「クワア、クワア！」ヤコブスはいつはおもしろいぞとばかり鳴きました。「こいつはとつくり見ておかんとな。かわず村の男たちが寄りあいでもやってるのかな？ それともだれかの誕生日の祝いかな？ パウンドケーキはあるんだろうな……？」

大食いヤコブスは、大好物のメットソーセージにおとらず、パウンドケーキが大すきでした。それでうるしみたいに黒いつばさをはばたかせると、白いパイプの煙めがけてさつと飛んで行きました。

2 マゲヌス村長のとんでもない考え

大食いヤコブスは半開きになった窓から、するりと部屋の中にしのびこみました。そしてカーテンのすきまから、左目で用心深く中のようにすをぬすみ見しました。

思ったとおりでした。かわず村の男たちが、ほんとに寄りあいをやっていたのです。でもパウンドケーキはなく、あるのはビールばかりでした。部屋はたばこパイプの煙だらけで、まるでもやがかかったようでした。旅館の主人で、でぶのニッケルなど、ビールをつぎからつぎへとつぐのに大わらわで、手が何本あってもたりないくらいでした。

とつぜん村長のマゲヌスが立ちあがると、げんこつでテーブルをドンとたたき、もったいぶったようすでいいだしました。

「かわず村の衆！ わしにはいい考えがあつてな！」

「いってみるや！」みんなが大声でいいました。

ただひとり年よりのひつじ飼いのシュトツフェルだけが、うたぐりぶかそうにぶつぶついいました。

「どうせろくな考えじゃあるまいって……」

窓のカーテンのかげでは、大食いヤコブスがつぶやきました。

「その考えて食べられるんだろうな！」

じつはヤコブスには、人間の話すことばがみんなわかったのです。ヤコブスはいちばん大きく、いちばん強く、いちばんずるがしこく、いちばん黒く、いちばん腹べこのからすだったばかりではなく——動物たちのことばとまったく同じに、人間のことばもしゃべれるたった一羽のからすだったのです。これはたいしたことでした！

「みな衆がどう思おうと、」と、マグヌス村長がいいました。「わしはわしらみんなが、百万長者になれる方法を知っているんだ。どうだ、みな衆！」

はじめみんなは、うんともすんともいいませんでした。まるでいいんとしてしまつて、軽い綿毛が一本落ちて、その音が聞こえるくらいでした。が、そのうちみんなはガヤガヤ大声でいいだしました。

「おしえてくれや、マグヌス村長。話してくれ！ どうすればわしらは百万長者になれるんだね？」

「そいつはばかげた考えどころか、気がいじみた考えにきまつてるがな。」さわぎがすこしおさまったところで、ひつじ飼いのシュトツフェルがいいました。「あんたどうやつて百万長者になるんだね、マグヌス村長？ 宝くじでも買おうっていうのかい？」